

## 英語クラス分けテスト結果の分析

奥 田 純 \*

Analysis of English Test Scores  
for Dividing Students into Different Classes

Jun Okuda

2011 年度入学生に実施した英語クラス分けテスト結果をヒストグラム等のグラフの形で示し、入学生の到達している英語レベル把握上のデータを提供。さらに、編成されたクラスごとの成績にも言及した。

**Key words:** 日本英語検定協会（英検）、英検各級レベル、正答率、クラス分け

## はじめに

本学ライフデザイン総合学科では、基礎教育フィールドの必修科目である英語（英会話 A）については、英語の習熟度に応じたクラス編成としているが、習熟度を測るため入学当初に短時間の英語テストを実施している。入学生には事前にテストのことは特に通知せず、従ってこのための準備は学生は行わずテストを受けている。

テストの形式・内容は日本英語検定協会（以下、英検）が実施している検定試験に準じたもので、全 33 問、内、16 問は英検 4 級レベル、8 問は 3 級レベル、4 問は準 2 級レベルとし、これらは 4 者択一、いわゆる 4 択形式としている。4 級レベルは、時制、助動詞の使い分け等初歩的な英文法の問題が多く、3 級・準 2 級レベルでは熟語や単語の知識を試す問題が多い傾向としている。残る 5 問については、短い日本語が与えられ、これに意味が合致する英文を完成する問題だが、英文の空欄を埋める単語・語句の組み合わせをこれも 4 択で選ばせる形式としている。レベルとしては、4 級が 3 題、3 級が 2 題で、いずれも異なる英文で、英語の語順を正しく理解できているかを試す問題である。<sup>(注 1)</sup>

英検の実際の検定試験問題は、文法、語彙、会話、読解、リスニングと多岐にわたるもので、本学で実施したテストはあくまでこの中の一部のカテゴリーに限定、その中で同種の問題形式に準じたも

ので、総合的な英語力を測るものではない。ただ、英検のレベルを基準にした問題に揃えることで、ある程度の傾向は読み取れ、習熟度を短時間のテストで判断する手段としては有用ではないかとの理由から上記で紹介したテスト内容とした。

## 正答率の分布状況

さて、このテスト結果をヒストグラムで表したのが、グラフ 1 である。「全問題正答率（％）分布状況」は各学生の全 33 問に対する正答数の百分率を 10％刻みの階級別に並べ、人数をカウントしたヒストグラムで、「90-100％」は「90％以上 100％以内」、「80-90％」は「80％以上 90％未満」、それ以下は、百分率は同じく「～以上～未満」を意味している。テストは入学生全員 92 名が受け、平均正答率は 43.7％であった。ヒストグラムを見ると、平均値が入る階級（「40 - 50％」）の人数より多い階級がその前後にあるのに気付く。30％台が一番多く、次いで 50％台がこれに続いている。ある程度の英語の力はあるグループとこれより力が落ちるグループに二分されているのではないかと読める。ただし、点数の低い方のグループが多く、点数の高い方は少なく、この中でも 70％台以上は限定的であることが読み取れる。

## 問題レベル毎の正答率の分布状況

ついで、グラフ 1 にはこの全体像に対して、英検の問題レベルごとに表したヒストグラムが並べ

\* 四條畷学園短期大学 ライフデザイン総合学科

である。「英検 4 級レベル正答率 (%) 分布状況」は 4 級レベルの全 16 問に対する正答数の百分率を 10 % 刻みの階級別に並べたものである。また、「英検 3 級レベル正答率 (%) 分布状況」は 3 級レベルの全 8 問に対する正答数の百分率を 10 % 刻みの階級別に並べたものである。

但し、「英検準 2 級レベル正答率 (%) 分布状況」は準 2 級レベルの全問題数が 4 問のため、上記の階級別表示になじまないことから、ありうる結果（全問正答からゼロ正答までの 5 つのケース）に分けて人数をカウントしている。「英検 3・4 級レベル正答率 (%) 分布状況」については、全問 5 問で、同じくありうる結果（全問正答からゼロ正答までの 6 つのケース）に分けて人数をカウントしている。

問題の難易度が高くなるにつれて、分布がグラフの右から左へと移動しているのが見える。極めて自然な現象であろうが、別のグラフ 2「問題レベル別平均正答率」を見ると、平均正答率と問題難易度の関係がさらに歴然とする。3 級と 4 級の中間レベルとみなしうる 3・4 級レベルの平均正答率が 3 級レベルのものより低いのは、英語の正しい語順の理解という問題内容が文法や語彙の問題より難しいことに起因していると考えられる。また、短時間での解答を要求しているため、学生によっては時間が足りず、問題順に解いていた場合は最後の語順の問題に十分な時間がとれなかった学生がいた可能性もその要因の一つとしてあげうる。

### 正答率のバラツキ

さらに、標準偏差を取ると、問題レベルごとにこの平均正答率からどのくらいバラツキがあるか、即ちレベルごとに学生間で正答率の差がどの程度であったかが窺われる。これを示したのがグラフ 3「問題レベル別標準偏差」である。難易度が高くなるにつれて、標準偏差は下がり、これも自然な現象であるが、問題の難易度が高くなると、より多くの学生の正答率が低下して、できない方に集中する傾向が表れ、特に問題数の少ない場合はこの傾向が強まるものと推定される。

やや細くなるが、全 33 問、問題毎の正答率を表したグラフ 4「問題レベル・問題番号別正答率」を見てみよう。横軸に表示している「4 級 1」とは 4 級レベルの問題で問題の通し番号が 1 であることを示している。従って、例えば「3 級 24」とは、問

題レベルは 3 級で問題の通し番号は 24 (24 番目の問題) となり、「3・4 級 33」は 3・4 級レベルで 33 番目の問題、つまり 33 問中最後の問題になることを示している。上述の標準偏差の違いはこのように問題番号ごとに並べると一見視覚的にはつかみにくい。ただ、問題レベルごとに正答率の高低差に注目すると、確かに標準偏差に示されているバラツキの差が見えてくる。

### 正答率の高低と問題の中身

ここで、例示にとどまるが、問題の中身に入り、一体どのような問題は正答率が高く、どのような問題が難しいのかを見てみよう。まず「4 級 1」は選択肢に isn't aren't don't doesn't の 4 つがあげられ、I が主語で動詞がすでに使われている英文の空欄を埋める問題である。正答率は 75.0% で全問中一番正答率が高かった。「4 級 15」は A と B の会話で、A の言ったことに対して B が答える英文の空欄を埋める問題で、no idea という語句に結びつく動詞を選ぶものである。正答率は 71.7% で 2 番目に高い正答率であった。一方、4 級レベルでも「4 級 4」は正答率が 31.5% と低かった。問題は、I will と未来のことを話す英文で、動詞の正しい形、すなわち、原形、現在分詞形、過去分詞形、to + 不定詞形のいずれかを選択するものである。「4 級 8」も 33.7% と 4 級レベルの問題の中では次に低い正答率であった。これも動詞の正しい形を選ぶ問題であるが、先に出た動詞のあとに to + 不定詞と続くことを理解しているかを試す問題である。

3 級レベルの問題では、「3 級 20」が最も正答率が高く 50.0% であった。「～で有名な」にあたる単語（形容詞）を選ぶ語彙の問題である。3 級レベルでは正答率が低いものは 20% 台となり、「3 級 24」が 22.8% であった。これも語彙の問題であるが、熟語として覚えていないと解けない問題で、「面倒を見る」にあたる《～ after》の～に正しい動詞を選ぶものである。

準 2 級レベルでは、英語としての難易度が 3, 4 級より急に高くなり、正答率の一番低かった「準 2 級 27」は、形容詞で言うところを《of ～》と、～の箇所をその形容詞の名詞形で言えることを理解していないと解けない問題である。正答率は 20.7% であった。3・4 級レベルの語順の問題に関しては、「3・4 級 32」が 50.0% と正答率がこのレベルでは一

番高かったが、「3・4 級 33」は 28.3% と正答率が同じく一番低かった。前者は、make という動詞を使役（させる）の意味で使う構文にできるかがポイントで、後者は現在完了形と such という単語の使い方が理解できているかを問うものである。

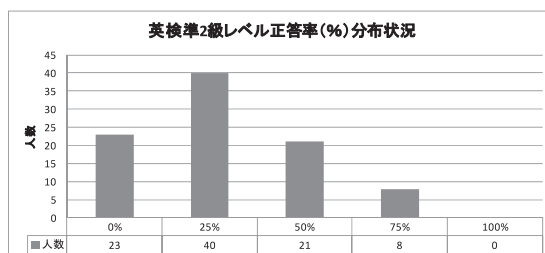
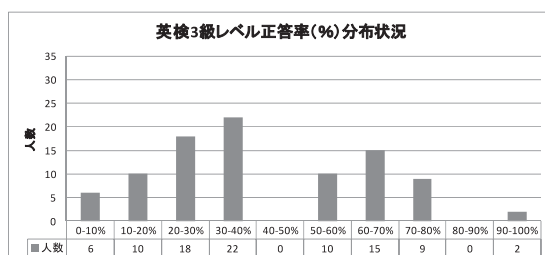
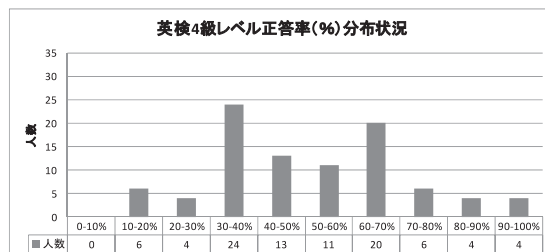
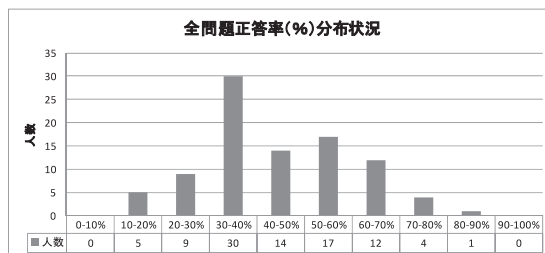
このように個別の問題について何が理解できていて、何が理解できていないかを分析することで、欠けているところをどのように補い、あるいは再教育していくかが英語教育上の勿論課題であるが、本稿の目的を超えるものであり、ここではクラス分け編成テストのデータを上記のような形で整理し、どのような問題の正答率が高く、逆にどのような問題の正答率が低いかを例示することで学生の英語力の全体像を明らかにするとどめたい。

### クラス分けの結果について

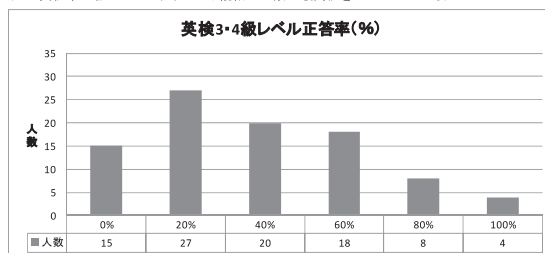
最後に、この英語クラス分けテストの結果に基づいて実際に編成したクラスでの成績について付言したい。成績順に「い」、「ろ」、「は」、「に」の 4 つのクラスに分け（人数は均等ではないが）、教科書も同じシリーズの一番やさしいものを「は」と「に」に、次のレベルのものを「い」と「ろ」で使用した。<sup>(注 2)</sup> 最終的な成績は、出席、宿題、期末試験を総合的に評価して出しているが、期末試験は試験として評価しているため、この試験の成績が一番英語の力自体を反映したものとなっている。期末試験でも「い」/「ろ」、「は」/「に」はそれぞれ基本的に同一問題としたので、「い」と「ろ」間、「は」と「に」間で比較が可能である。平均正答率と標準偏差を示したのがグラフ 5 である。<sup>(注 3)</sup>

「い」と「ろ」の間の顕著な違いは明らかである。学生全体の中でできるグループとそうでないグループに二分されている可能性があることは既に指摘したが、「ろ」の中で一種の断層が生じている可能性がある。クラス分けテストの正答率が 50% 台をキープしているかどうかで、やや乱暴だが分かれ目がある模様である。一方、「は」と「に」の間での平均正答率の違いはさほどではないが、標準偏差の違いが際立っている。これは、「に」のクラス編成上の特殊要因が働いているのではないかとと思われる。何らかの理由で、クラス分けテストにきちんと答えなかった学生が、テスト結果が低かったため「に」に割り振られたことが原因と考えざるをえない。<sup>(注 4)</sup>

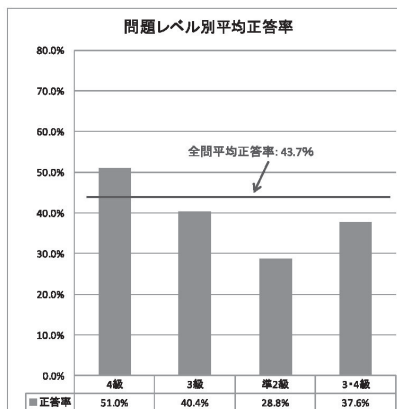
グラフ 1



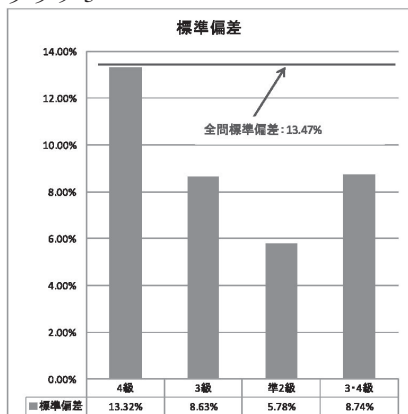
(この英検準 2 級レベルのグラフだけ縦軸の人数の最高値を 45 人としている)



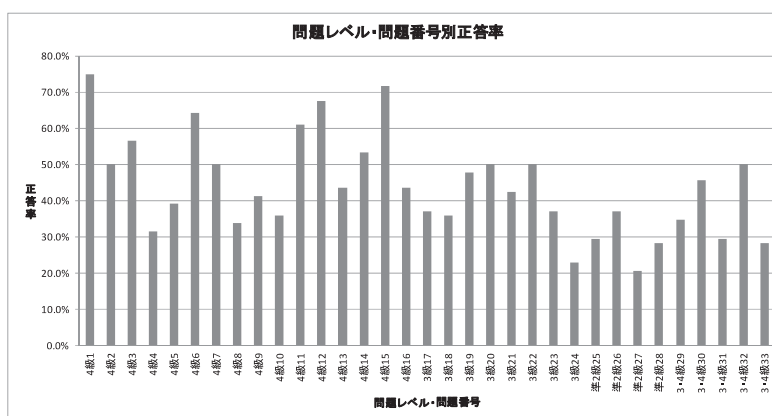
グラフ 2



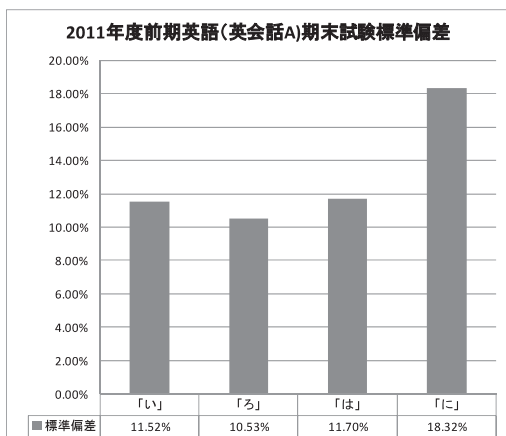
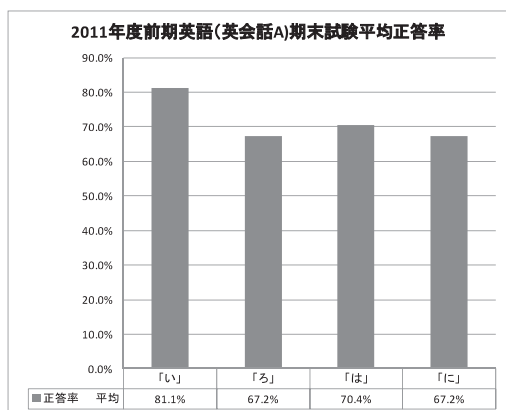
グラフ 3



グラフ 4



グラフ 5



(注)

- テストに出題した問題は、いずれも旺文社の編集、出版になるもので『英検準2級総合対策教本』、『英検3級総合対策教本』、『英検4級総合対策教本』を参考にした。尚、英検がそのウェブサイトで公表している「各級の目安」によれば、4級は「中学中級程度」、3級は「中学卒業程度」、準2級は「高校中級程度」である。テスト問題には含めなかった英検2級レベルは、同じ目安によれば因みに「高校卒業程度」で、英検準1級レベルは「大学中級程度」となる。
- いずれもマクミランランゲージハウス社の『Get Real! Foundation』及び『Get Real!1』。同社の基準では、前者はTOEICのスコアが200～300向け、後者は300

～400向けとしている。因みに、国際ビジネスコミュニケーション協会（TOEICおよびTOEIC Bridgeを運営している）から公表されているデータでは、英検4級合格者のTOEIC Bridge（TOEICより易しい英語初・中級レベル対象のテスト）平均点は、110.2、英検3級合格者は120.8、英検準2級は134.5（英検合格者でTOEIC Bridge受験者へのアンケート結果）。TOEICとTOEIC Bridgeとのスコア比較では、TOEIC Bridge

が110の場合、TOEICは280、同120は310、同130は345、同140は395との予測が公表されている。（公式ウェブサイト：<http://www.toEIC.or.jp>）

- 期末試験の問題はクラス分けテストの問題スタイルとは異なり、リスニングも含み、テキストに沿った問題とはしているが、基本的に応用問題形式をとり、英語の理解力を試すことに主眼を置いてテキスト、辞書の持ち込みも許可している。こうした中で、リスニングは総じて点数が良いのに対し、英文の空欄を英単語・語句で埋める（選択式）問題は不得手の傾向がはっきりしている。
- 実際、「に」のクラスで教えていて、そのような答えをした学生がいたためで、授業中の応答振りからもそうした学生は本来はもっと高い点が取れたはずであると推測できる。

（2012. 1. 30 受稿，2012. 2. 1 受理）